

平安和文の「いはむや」の用法

—— 会話文中の用例を中心に ——

関 一 雄

0

「いはむや」は、漢文訓読によって生じたとする説が一般化し、類義語である「まして」との違いは必ずしも明確にされていない。本稿は、「いはむや」の「まして」との意味差に重点を置き、「いはむや」が、会話文に多く用いられるところから、その会話主の物語の登場人物としての役柄に注目してみたい。そして、「いはむや」が何故に「役柄語」としての性格をも持つに至ったかを、「まして」との意味差に起因するものとする観点から捉え直してみる。

(注1) 周知のごとく、「いはむ(ん)や」の研究の始まりは、山田孝雄『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』(一九三五年)である。

山田は当時の文語文に用いられる「況や……をや」の例文を挙げ、「この語法も亦漢籍の訓読により導かれたるものなりとす。」と述べているが、その記述の後に、平安朝の中期以前の用例として、本稿

でも採り上げる『竹取物語』『うつほ物語』『伊勢物語』等の例を用いて、「右の如くなれば、「いはんや」といふ語はなほ或は当時の普通語たりしもの如し。」と論じている。その後、春日政治「古点の況字をめぐる」(『国語と国文学』15巻10号、一九三八年)・小林芳規「古点の況字統貂」(『東洋大学紀要』12、一九五八年)と詳論が続いて発表され、このテーマは『漢文訓読語(訓点語)』研究の中で深められたのである。一方、犬飼隆「副詞「まして」の発生と成長」(『学習院女子短期大学「国語国文論集」第9号、一九八〇年)では、「和文語」の副詞の「まして」との比較において「いはむや」を論じて、次のような結論(の一部)を導いている。「動詞から転じて副詞になった」「まして」の意義が程度の比較にのみかわって具体性に欠けること、そして前後を対比するはたらきをもつことが(「いはむや」と)共通する。そのような理由から、「まして」と「いはむや」が区別されずに用いられる場合があったのではないか。」と。この踏み込んだ見解は、和文に用いられた「いはむや」の考察を深めたものとして、注目に値する。ただ、この論文に

しても、「いはむや」を「漢文訓読語」とする前提で論述されていることには変わりがない。森田良行「基礎日本語」（初版一九七七年）では、「まして」の（関連語）として「いわんや」を挙げ、「『いわんや』は、「言はむや」で漢文訓読で生じた語」と記す。

（注2）「役柄語」は、本稿で仮に用いるもので、金水敏「役割語探求の提案」（『国語論究&国語史の新視点』（二〇〇〇年）所収）で提唱され、『ヴァーチャル日本語役割語の謎』（二〇〇三年）・『日本語存在表現の歴史』（二〇〇六年）等で深められた「役割語」の考え方に示唆を受けたものである。ただし、本稿では「漢文訓読語」とされる「いはむや」は、特に金水（二〇〇〇年）の書名から特色づけられる「ヴァーチャル」なものとして、捉えてはいない。「いはむや」の、和文の會話に用いられたものは、むしろ、当時の貴族階級が日常的に用いた言葉であり、それが時には會話主の個性（キャラクター）を表すこともあったとするものである。

1

『竹取物語』では、「いはむや」は次のように用いられる。

以下、各用例の後に、類義語「まして」との意味差を確認するために【 】の中に現代語への置き換え（いわゆる、現代語訳）を添える。

◎おのことも、仰せの事をうけたまはりて申さく、

「仰の事はいと申さうとし。たゞし、この玉、たはやすくはえ

取らじを。いはむや、竜の頸の玉は、いかゞ取らむ」と申あへり。（二二三）

【「新日本古典文学大系」による。以下同じ】

【家来ドモガ（大納言ノ）仰せ言ヲ承ツテ申シ上ゲルニハ、「仰セ言ハ大変ニカタジケノウゴザイマス。デスガ、コノ玉ハ、容易ニハ採ルコトハ出来マセヌ。言ウマデモナク、竜ノ頸ノ玉ハ、ドウシテ探レマショウ」ト皆デ申シ上ゲル。】

一方「まして」は、次のように用いられる。

○大納言、起き居てのたまはく、

「汝ら、よく持てこずなりぬ。竜は、鳴る神の類にこそありけれ。それが玉を取らむとて、そこらの人々の、害せられなむとしけり。まして、竜を捕へたらましかば、又こともなく、我は害せられなまし。（略）（四〇）」

【大納言ガ、起キ上ガリスワツテオッシャルニハ、「オマエタチ、竜ノ頸ノ玉ヲヨクゾ持ツテコナカッタ。竜ハ、空ニ鳴ル雷ト同類デアッタ。ソノ玉ヲ取ロウトシテ、多クノ人々ガ殺サレヨウトシタ。マシテ、竜ヲ捕ラエデモシタラ、又問題ナク、私ハ殺サレテイタダロウ。（略）】

家来が「漢文訓読語」を用い、主人である大納言が「和文語」

の「まして」を用いている。「漢文訓読語」が一定の教養のある人の用いる語であったとすれば、これは、逆の現象のように思われる。

では、「まして」の地の文の用例を挙げてみる。

○内侍「略」まさに、世に住み給はん人の、うけたまはり給はで有なむや。いはれぬ事なし給ひそ」と、言葉はづかしく言ひければ、これを聞きて、ましてかぐや姫、聞くべくもあらず。

(五二二ペ)

【内侍、「略」ドウシテ、コノ世ニ住ミナサロウトスル人が、(帝ノ仰言ヲ)オ受ケ申シ上ゲナサラナイデイラレヨウカ。筋ノ立タヌコトヲナサルナ」ト、言葉ヲ強メテ言ッタノデ、コレヲ聞イテ、ナオサラカグヤ姫ハ承知スルハズモナイ。】

この「まして」は、「いはむや」との意味差が明確に表れている例である。

『うつほ物語』では「いはむや」は、次のように用いられる。

◎阿修羅、いやますますに怒りていはく、「(略)たはやすく来たる罪だにあり、いはむや、そこばくの年月、なで生ほし木づくる。(略)「とひて、(俊陰①二七ペ)

〔新編日本古典文学全集〕による。以下同じ)

【阿修羅ハマスマス怒ッテ言ウニハ、「略」(オ前ガ)ヤスヤストココマデ入り込ンデ来タ罪ダケデモ重イノニ、言ウマデモナイガ、多クノ年月ヲカケテ大切ニ守リ育テタ木ダ。(略)「ト言ッテ】

◎比叡の山に、総持院の十禅師なる大徳のいふやう、「略」百万の神、七万参千の仏に、御灯明、御幣帛奉りたまはば、仏神おのおの与力したまはむ。天女と申すとも、下りましなむ。いはむや、娑婆の人は、国王と聞こゆとも、赴きたまひなむをや。また、山々、寺々に、食なくものなき行ひ人を供養したまへ」と聞こゆ。(藤原の君①一五五ペ)

【比叡山ノ総持院ノ十禅師デアル高德ノ僧ガ言ウニハ、「略」百万ノ神、七万三千ノ仏ニ、オ灯明、御幣ヲ献納サレレバ、仏神ガソレゾレオカラ添エテ下サルダロウ。天女ト申シ上ゲル方モ、天下ッテイラッシャルダロウ。言ウマデモナイガ、コノ世ノ人々ハ、国王ト申シ上ゲル方デモ、アナタノ願イヲ聞キ入レナサルダロウ。マタ、山々、寺々ニ食モナク苦行シテイル人ヲ供養ナサイ」ト申シ上ゲル。】

右は、阿修羅と大徳が用いた例である。大徳は經典等を訓読することが日常的であるから自然にそれが会話に出たとする考え方も出来そうだが、阿修羅については当てはまらない。

◎(千蔭↓帝)「千蔭が上に災ひなることを奏しはべりつるとなむうけたまはりし」。帝、「さらにいふことなし。人の上にだにいふことなかりし人なり。いはむやさらに親の上にはいひてむや。心を知れらむ人は、さる逆さまのことをいふとも、まことと思しなむや。(略)」「忠こそ①二四四(へ)」

【ワタシノ身ノ上ニ災難ガフリカカルヨウナコトヲ、(忠コソ)奏上シタト聞キ及ビマシタ」。帝、「ソソナコトハ少シモイッテイナイ。他人ノ噂サエイッタコトノナイ人ダ。言ウマデモナイガ大切ナ親ノ身ノ上ノコトヲワルクイウコトガアロウカ。忠コソノ性格ヲヨク知ッテイル人ハ、ソソナ道理ノ通ラナイコトヲイッテモ、本当ダトオ思イニナルダロウカ。(略)】」

右の例は、帝が強い口調で、千蔭を諫めているものである。「いはむや」は、その後続く文言について、言うまでも無いことを言って置くのだ」という強い語気と含意を伴って、聞き手(臣下の千蔭)にインパクトを与える効果を有しているのである。

◎おとど、(兼雅↓元行)「(略)これは、かくにはかに労ある宣旨にてあることなるを、女の饗などのこと、いと清らになむせまほしき。饗のこと、心殊にあるべし。いはむや、ただ今の女官どももなり。やむことなき典侍など、はたものしたまふを、用

意せむ。(略)」など、いとくはしくのたまひて遣はしつ。

(内侍のかみ②二六六(へ))

【右大臣殿、「(略)コノ度ハ、コノヨウニ急ニ恐レ多イ宣旨ヲ受ケテノコトダカラ、女官タチノ饗応ナドノコトハズツト立派ニヤリタイ。宴ノコトナド、コトニ入念ニ準備セヨ。言ウマデモナク、評判ノ女官タチデアル。ソノ中ニハ高貴ナ家柄ノ典侍モマタオイデニナルカラ、十分ニ心ヲクバツテホシイ。(略)」ナドト、タイソウ詳シク言イ含メテ自邸ニオ遣ワシニナツタ。】

右は、兼雅が部下の元行に饗宴の準備を「しつかりやれ」、と命じている会話語である。

◎右のおとど、(正頼↓季明)「(略)宰相の君におきたてまつりては、正頼にくはしくいふ人侍らましかば、何かともかく思ひたまへまし。仰せ言なくとも、むかしのことをさらに忘れはべらず。いはむや、さらにかく仰せらるれば、よからぬ男子どもよりも、いかでとなむ思ひたまふる」など聞こえたまふ。

(国譲上③二七(へ))

【右大臣殿ハ、「(略)宰相ノ君ニ関シマシテハ、コノ正頼ニ詳シクイッテケレル人ガオリマシタラ、ドウシテトモカクモ迷ウコトガアツタデショウカ。タトエ兄上ノ仰セガナクトモ、昔カラノヨシミヲ忘レルコトハケツシテゴザイマセン。言ウマデモ

ナク、コノヨウナオ言葉ヲ賜ツタウエハ、フツツカナ自分ノ息子ドモナド以上ニ、ゼヒトモオ世話ヲ致シタイモノト存ジテオリマス」ナドト申シ上ゲナサル。】

この例は前例とは逆に、正頼が重病の兄季明に後事を託されて、兄の心残りに思っている事柄について、「仰せ言なくとも」と言い、ましてや、「仰せらるれば」という文脈で用いたものである。「まして」では言い表せない含意が「いはむや」に込められている。

◎おとど、(正頼↓忠澄)「しかれど、一ところをだにわれらかしづきたてまつるべし。いはむや、七ところの孫の宮たち迎へたてまつりたらむに、何のこととかあらむ。(略)」

(国譲下③三六三べ)

【左大臣殿、「ソウハイッテモ、オ一人デモ我ラハ大切ニオ育テ申シアゲルダロウ。言ウマデモナク、七人ノ孫ノ宮タチヲオ迎エ申シアゲルノニ、ナンノコトガアロウ。(略)】

右は、正頼が息子の忠澄に返す言葉の中に用いられ、「いはむや」以下を強く主張しているものである。

「いはむや」は、このほかに「文人たち」とおぼしき会話文中に1例使われている(祭の使①四九一べ)が、以上の通り、『うつ

ほ物語』では会話文に限定され、地の文の用例を見ない。この点から、『竹取物語』の「いはんや」の1例は、作者によって恣意的に用いられたので無く、両作品に共通する意図的な使用方法であると考えられる。身分の低い者や阿修羅のような異常な登場人物の役柄を表す一方で、高貴な人物の会話では「まして」では表し得ない語気・含意を伴って、会話語としての「いはむや」の意図的な使用がなされたものと考えられる。

『落窪物語』では「いはむや」は、次のように用いられる。

◎(新大納言忠頼↓子供たち)「異子供、是うらやましとだに思ふべからず。同じ様に力入り、親に孝したるだに、少し人々しきになんよろしき物取らす。いはんや、こゝらの年比返り見るを恩にやと思へ」(巻四・二一一べ)

〔日本古典文学大系〕による。以下同じ)

【ホカノ子供タチハ、女君ヲウラヤマシイトサエ思ッテハイケナイ。大将御夫妻ト同ジヨウニ力ヲイレテ親ニ孝行シタ者ガイナイ。世間デモ少シ人間トシテ取り柄ノアル者ニハ、相当ノ物ヲ与エルノガ習慣ダ。言ウマデモナイガ、多年ノ間、才前タチノ面倒ヲミタ事ヲ、親ノ恩カト思エ】

◎(越前守↓道頼)「いと不便なる事。身づからしおき侍らぬ事なりとも、殿にのみなんしろしめすべき。いはんや更に我がかく

しおくなどいひおき侍りしにたがひては。誰もく皆少しづゝ分たれ侍るめる物を」とて、取らねば、(巻四・二二六ペ)

【ソレハタイヘン都合ノ悪イ事デス。假ニ故大納言自身ガ遺産ヲソウ処理シテオカナカッタ事デゴザイマシテモ、遺産ハ大将様ダケガ、領有ナサルベキデス。言ウマデモナク、ソノウエ故大納言ガ、「私ガコウ処置シテオク」ナドト遺言シテオキマシタノニ違反シテハイケマセン。故大納言ノ遺族ハ誰も彼モガソレゾレ少シズツ分ケラレテオリマスヨウデスカラ」ト受ケ取ラナイノデ、】

右の二例は男性貴族の會話に用いられたものである。後者の例に「新潮古典集成」が「紋切型の男性用語」と注するのは、「漢文訓読語」＝男性會話語とする通説からの固定觀念によつたものか、と思われるが、その非であることは次の例で明快である。

◎(左大臣邸カラ出向イテル女房タチノ心中)「(略)同じ程の殿にだに、御心よからん方にこそ仕うまつらめ。いはんやさらにこよなや。(略)」と、下づかへまで思ひて、(巻四・二三九ペ)

【(略)同じ身分程度ノオ邸デサエ、ソノ御主人ノオ氣立テノヨイホウニコソ御奉仕シタイワネ。言ウマデモナク左大臣ト權帥デハ身分ニ格段ノ差ガアルモノネエ。(略)ト、下仕エマデガ思ッテ、】

(一)内に補つた通り、會話文のものではないが、女房たちの心中を會話並に描出した表現で、位相差ではなく、意味差によって、「いはむや」が用いられたものである。

一方、「まして」の用例は、

○(大将ノ北ノ方ノ新大納言)「(略)こゝには只何もかもなたびそ。君達にあまねく奉らせ給へ。ましてこゝに誰もく住みつき給へるに、おもはぬ方に侍らん、いと見ぐるし。(略)」

(巻四・二二二ペ)
【(略)私ニハ何モクダサルナ。オ子様方ニスベテ差シ上ゲテクダサイ。マシテコノ家ニハオ子様方皆様ガ住ミツイテイラツシャルノニ、思イガケナイコトデゴザイマスノガ、タイヘン見苦シイ。(略)】

○越前守たゞ腹立ちに腹立ちて、爪はじきをして、「うつし心にはおはせぬか。(略)まろらをいたづらになし給はんとや。(略)ひきかへて、かくねんごろにかへりみ給ふ御徳をだに、かつ見で、かくの給ふ。まして昔いかなるさまに。(略)」といへば、(巻四・二二七ペ)

【越前守ハ、ヒドク立腹シ、爪弾キヲシテ、「母上ハ正氣デイラツシャラナイノデスカ。(略)私タチヲ破滅サセヨウトナサ

ルノデスカ。(略)ソレニヒキカエテ、コノヨウニ御親切ニ配慮シテクダサル御恩徳ヲサエ、ヨク理解セズ、コノヨウニオツシャル。マシテ、昔ハドンナフウニ(女君ヲ虐待ナサツタカ)。(略)「ト言ウト、」

前掲の引用で「いはむや」を用いて居た越前守が、右の例では「まして」を用いている。この例は、聞き手は越前守の母親であり、いかに理不尽なことを言う聞き手でも、強い語気を伴う「いはむや」は、さすがに用いにくいのである。「おはせぬか」「なし給はんとや」「の給ふ」などの母親の動作はキチンと尊敬語で表現していることも関連する。

○北の方、「(略)たゞ受領のよからんをがなとこそ思ひつるに、まして上達部にもあなり。いとくうれしき事なり。(略)」といへば、(巻四・二二六ペ)

【北ノ方ハ、「略」受領デ悪クナイヨウナ方ヲ婿ニシタイト考エテイタガ、ゴ紹介ノ婿君ハソレ以上ノ上達部デイラツシャルヨウダ。コノ上モナク大変ウレシイコトノヨウダ(略)ト言ウト、】

○大臣対面し給ひて、物語し給ふ。「よそにても心ざし侍りしを、今はましてなん。(略)」(巻四・二四二ペ)

【左大臣ハ権帥ト対面ナサツテ親シクオ話しナサル。「他人デ

アツタ時デモアナタニ好意ヲモツテイマシタガ、縁続キニナツタ今ハマシテ(親シクシタイト存ジマス。(略))】

右の二例のうち、前者のように、「まして」は文中でも自由に用いられるとともに、「いはむや」とは意味差も大きい。また、後者の例は、「まして」に続けて「なん」と言つて、後は文脈に依存して文意を補うという用法であり、「いはむや」には見られないものである。

2

『伊勢物語』では、「いはむや」は、次のように用いられている。

◎されど(女ハ)若ければ、文もおさくしからず、ことばもいひ知らず、いはむや歌はよまざりければ、かのあるじなる人、案を書きて、かゝせてやりけり。(一七三ペ)

〔日本古典文学大系〕による。以上同じ〕
【ケレドモ、(女ハ)年少ナノデ、手紙モシツカリ書ケズ、恋ノ言葉モ知ラナイ、言ウマデモナク歌ハ詠マナカッタカラ、例ノソノ家ノ主人デアル男ガ、手紙ノ案文ヲ書イテ、ソレヲ女ニ書カセテ贈ツタ。】

前節の用例と違うのは、地の文に用いられ、しかも、文中の使

用例である。ここで、何故に「いはむや」が用いられたかは、次に引用する「まして」と対比して見れば、明らかになる。

○女、

大淀の浜におふてふみるからに心はなぎぬ語らはねども

といひて、ましてつれなかりければ、おとこ、

(七十五段、一五四ペ)

【女ハ「大淀ノ浜ニ生エテイルトイウ海松、ソノ見ルトイウ言葉ドオリ、アナタヲ見ルトモウ心ハ落チ着キマシタ。契リハ交ワシマセンデモ」ト詠ンデ、以前ヨリモ冷淡デアッタノデ、男、】

この明確な意味差は、1で採り上げた『竹取物語』の「いはむや」と「まして」とのそれと全く符合しているものである。「いはむや」の地の文での使用は、『伊勢物語』においては、歌物語としての性格上、「いはむや」を會話語に用い、登場人物の役柄と関わらせる必要がなかったのである。

これに関連して、次に、『蜻蛉日記』と『源氏物語』の「いはむや」と「まして」の用例を見る。

『蜻蛉日記』では次の通り、「いはむや」は「まして」と同じ場面に併用されている。

◇うち過ぎて、山路になりて、京にたがひたるさまを見るにも、このごろのこちなればにやあらむ、いとあはれなり。いはんむや、関にいたりて、しばし車とどめて、牛かひなどするに、むな車引きつづけて、あやしき木こりおろして、いとをぐらき中より来るも、こちひきかへたるやうにおぼえていとをかし。(略) いふかひなき心だにかく思へば、ましてこと人はあはれと泣くなり。(中・一九四ペ)

〔新編日本古典文学全集〕による。以下同じ。】
【賀茂川ノアタリヲ過ギテ、山路ニナツテ、京トハマルデ違ッタ景色ヲ見ルニツケテモ、コノゴロノヒドク孤独ナ、何事ニモ感ジヤスクナツタ心持ノセイデアロウカ、シミジミト心ウタル。言ウマデモナイガ、逢坂ノ関ニ着イテ、シバラク車ヲトドメテ、牛ニ餌ヲ与エタリシテイルト、荷車ヲ何台モ引キ連ネ、見タコトモナイ木ヲ伐リ出シテ、ホノ暗イ木立ノ中カラ出テ来ルノヨミルト、気分ガウツテ変ワツタヨウニ思ワレテ、トテモオモシロイ。(略) 絶望的デ余裕ノナイワタシノ心デサエ、コレホドニ感ジルノダカラ、マシテ同行ノモウ一人ノ人ハ、景色ノスバラシサヲメデテ涙ニムセンデルヨウダ。】

作者の唐崎破いの紀行の一節で、賀茂川を過ぎた辺りの情景に感動した後、逢坂の関の風情を述べるに先立って「いはむや」を

用いている。有名な景勝の地を描写するに当たって、今更書くまでもないが、という作者の用心深い表現手法と言えるのではないか。さらに、自分の境遇よりはましな同行の人のことに及んで「まして」を用いるのも、類義語の意味差を意識する用法である。

「まして」は、前掲の他に、

○このいまひとかたの出で入りするを見つあるに、いまは心やすかるべきところへとて、ゐて渡す。とまる人まして心細し。

(上・一〇二六)

【アノモウ一人ノ方ガ姉ノモトニ通ウノヲズツトカタワラカラ見ツツ暮シテイルウチニ、トウトウ気兼ネノナイ所ヘト姉ヲ連レテ行クコトニナッタ。アトニ残ルワタシハ、イヨイヨ心細イ。】

○子どもあまたありと聞くと聞くと、むげに絶えぬと聞く。あはれ、ましていかばかりと思ひて、とぶらふ。(上・一〇七六)

【子供ガ幾人モイルト聞イテイル人ノ所モ、アノ人ノ訪レガスツカリ途絶エテシマッタト聞ク。アア、ワタシ以上ニドンナニカト思ツテ、手紙ヲヤル。】

の例を見ても、「いはむや」とは、明確な意味差を確認できる。

『源氏物語』でも、次の通り「いはむや」は「まして」と同じ場

面に併用されている。

◇(源氏夕霧)「略」(七絃琴)調べひとつに、手を弾きつくさん事だに、はかりもなき物なり。いはむや、多くの調べ、わづらはしき曲、おほかるを、心に入りしさかりには、世にありとあり、こゝに伝はりたる譜といふものゝ限りを、あまねく見合はせて、後くには、師とすべき人も、なくてはなむ、この道、ならひしかど、猶、あがりての人には、当るべくもあらじをや。まして、「この後」といひては、つたはるべき末もなき、いと、あはれになむ」(三、若菜下三五二六)

「日本古典文学大系」による

【「略」(七絃琴) アル調子一ツヲ弾キコナスコトダケデサエ、計リ知レヌホドムズカシイモノノヨウダ。言ウマデモナイガ、多クノ調子、ヤツカイナ曲ガタクサンアルノヲ、ワタシガコレニ熱中シテイタコロニハ、マツタクアリトアラユル、コノ国ニ伝ワツタ譜トイウ譜ノ全部ヲドレモコレモ調べアワセテ、シマイニハトウトウ師ト仰グベキ人モナクナルホド打チコンデ習ツタモノダガ、ソレデモヤハリ昔ノ名人ニハ追イツキソウニナイツテコトヨ。マシテナオサラ、コレカラ後ノ世トイウト、伝授デキソウナ子孫モイナイノガ、マツタク心カラサビシイコトデネ】

『蜻蛉日記』の地の文は『源氏物語』の会話文に共通するところがある、と見てよいのではないか。何となれば、『蜻蛉日記』は作者自らの語りであり、その語りのなかで、前掲のような「いはむや」と「まして」の意味差に基づく用法がなされたのである。一方、『源氏物語』では、登場人物の背後にいる作者が、主人公光源氏をして「七絃琴」の弹奏と伝授の難しさを「いはむや」と「まして」とを使い分け、息子の夕霧に語りかけさせているのである。

3

『栄花物語』になると、会話文と地の文に「いはむや」が用いられるようになる。また、「まして」との対比は必ずしも要しないところから、「いはむや」の用例に限り、番号を付して挙例する。

会話文の例

1 (道長→明順)「かくあるまじき心な持たりそ。かく幼うおはしますとも、さべうて生まれたまへらば、四天王守りたてまつりたまふらん。ただのわれらだに、人の悪しうするにもはら死なぬわざなり。いはんや、おぼろけの御果報にてこそ人の言ひ思はんことによらせたまはめ、まうとたちは、かくては天の責をかぶりなん。われともかくも言ふべきことならず」

(はつはな①四三九ペ)

〔新編日本古典文学全集〕による。以下同じ

【コノヨウナ不都合ナ心ヲ持ツテハナルマイゾ。若君ハコノヨウニ幼クイラツシャロウトモ、シカルベキ因縁ガアツテコノ世ニオ生マレニナラレタ以上、四天王ガオ守リ申シ上ゲナサツテイルダロウ。普通ノ我々ノヨウナ者デモ、人ノ憎シミヲ受ケテモ全ク死ヌナドアリ得ヌコトデアル。言ウマデモナイガ、イイ加減ナ御果報デアラレタラ、人ガドウ言イドウ思ウカニ左右ナサレモシヨウガ、御宿運格別ノ若宮タゾ、オ前タチハコンナコトヲシテイテハ天罰ヲ被ルコトニナロウ。コノワタシガトヤカク言ウベキコトデハナイガ】

1は、道長が、明順を強い口調で叱責する場面である。「いはんや」以降は、【言ウマデモナイガ】と云ってにおいて、敢えて言う言葉に、明順は震え上がって、その数日後に死に至るのである。

「全集」の頭注では、先行句の「もはら」の注に「続く「いはんや」とともに漢文訓読系の語。道長の威嚇的なよそよそしい言葉遣い。」とある。「威嚇的な」はよいとしても、「よそよそしい」という注はこれまでの用法からすれば、「いはんや」については、当たらない。

2僧都の、御髪おろしたまふとて、(院源僧都)「(略)三帰五戒を

受くる人すら、三十六天の神祇、十億恒河沙の鬼神護るものなり。いはんや、まことの出家をや」など、あはれに尊くかなしきことかぎりなし。(うたがひ②一七八ペ)

【僧都が御髪ヲオ下ロシニナロウトシテ、(院源僧都)「(略)三偏五戒ヲ受ケル人デサエ、三十六天ノ神祇、十億恒河沙ノ鬼神ノ護リガアルモノデアアル。言ウマデモナク、真実ノ出家ニオイテハナオサラデアアル」ナドト、シミジミト尊クモカナシイコトハ限リナイ。】

3 (永昭講師)「(略)法華經書写供養の者、かならず切利天に生る。いかに況んや、この女房のいづれか法華經を読みたてまつらざらん、兜率天に生れたまで、娯楽快樂したまふべし。況んや、金銀、瑠璃、真珠等をもて書写供養したまへり。(略)」

(もとのしづく②二四〇ペ)

【(略)法華經ヲ書写供養スル者ハ、カナラズ切利天ニ生マレル。殊更ニ言ウマデモナク、コノ女房ヲチノ誰ガ法華經ヲオ読ミ申シ上ゲナイ者ガアロウカ、兜率天ニオ生マレニナツテ、娯楽快樂ナサルニ相違アルマイ。言ウマデモナク、金銀、瑠璃、真珠等ヲモツテ書写供養ナサツタ。(略)】

3の「いかに況んや」とあるのは、これまでに見られなかった用法で、「いはむや」より更に語気の強い言い方として会話に使われたと思われる。

4 (院源僧都)「(略)輪王の位久しからず、天上の楽しみも五衰早く来り、ないし有頂も輪廻期なし。いはんや世の人をや。(略)」(つるのはやし③一六九ペ)

【(略)天輪聖王ノ位モ久シクナク、天上ノ愉樂ニモ五衰ガ早ク訪レ、マタ有頂天ニモ輪廻ノヤム時ハナイ。言ウマデモナク、人間世界デハナオサラデアアル。(略)】

地の文の例

1 四天王立ちたまへり。一仏の御装かくのごとし。いはんやならばせたまへるほど、心に思ひ、口に述べべきにあらず。

(たまのうてな②三〇五ペ)

【四天王モ立ッテイラツシャル。一仏ノ御装イハカクノゴトクデアアル。言ウマデモナク九体ノ阿陀如来ガオ並ビニナツテオラレル有様ハ、心ニ思イ、口ニ述ベルコトモデキナイ。】

2 「十千の魚、十二部經の首題の名字を聞きて、みな切利天に生れたり」とあり。いはんや五日十座のほど講ぜられたまふ法華經の功德いみじう尊し。(御裳ぎ②三五一ペ)

【十千ノ魚ハ、十二部經ノ首題ノ名字ヲ聞イテ、皆、切利天ニ生マレタ」トアル。言ウマデモナク、五日間朝夕十座ニワタツテ講ゼラレナサル法華經ノ功德ハ極メテ尊イ。】

3 一たび御名を聞きてかかり、況んや七仏を見たてまつらむほ

ど、思ひやるべし。(とりのまひ②四一一べ)

【一度御名ヲ聞イテサエコレホドアル。言ウマデモナク、七
仏ヲオ見上ゲ申シ上ゲル間、ソノ功ハ想像スルガヨイ。】

『大鏡』でも「いはむや」は、会話文に1例、地の文に2例用い
られている。

会話文の例

1 (皇后安子↓村上天皇)「いかでかゝる事はせさせたまふぞ。いみ
じからんさかさまのつみありとも、この人くをばおぼしゆる
すべきなり。いはんや、丸がかたざまにてかくせさせたまふ
は、いとあさましう心うき事なり。たゞいまめしかへせ」

(第三、右大臣師輔 一一七べ)

【日本古典文学大系】による。以下同じ】

【ドウシテコノヨウナコトヲナサルノカ。タトエ非常ナ大逆ノ
罪ガアルトシテモ、コノ人々ハオ赦シニナルベキダ。イウマデ
モナク、ワタクシニカカワリノアルコトニコノヨウナ御処置ヲ
ナサルトハ、ホントウニアマリニモ辛イオ仕打チダ。今スグオ
召シ返シクダサイ】

皇后安子が、村上天皇に強い口調で懇願する。天皇はやむなく
皇后の願いを聞き入れる場面である。女性の会話文に用いられる

のは、これまでに無かった点が注目されるが、1で『落窪物語』
の女性の心話文に見え、2の『蜻蛉日記』に見られた通り、「い
はむや」は男性専用語でないことが、この例で更に確認できるわ
けである。

地の文の例

1みかど(村上)もこの女御殿(安子)にはいみじうをちまうさ
せたまひ、ありがたきことをも奏せさせ給ふことをば、いなび
させたまふべくもあらざりけり。いはんや、自餘の事をば、ま
うすべきならず。(第三、右大臣師輔 一一五べ)

【村上天皇モコノ女御ニハ随分恐レハバカリナサツテ、ムズカ
シイコトモコノ女御ノ奏上ナサルコトハ、オ拒ミナサルコトハ
デキナカッタ。言ウマデモナク、ソレ以外ノコトハ申シ上ゲル
ベキデナイ。】

2いさゝかのことだにこのよならず侍なれば、いはんや、かばか
りの御ありさまは、人のともかくもおぼしをかんによらせ給べ
きにもあらねども、いかでかは院ををろかにおもひ申させ給は
まし。(第五、太政大臣道長 一二二六②)

【ドンナ些細ナコトデモ前世ノ宿縁デキマルコトデスカラ、言
ウマデモナク、コレホド重大ナ御事態ハ、一、二ノ人ノトカク
ノ思シ召シデオキマリニナルハズノモノデモアリマセンケレド
モ、ドウシテ女院ノ御配慮ヲオロソカニ思イ申シ上ゲナサイマ

「いはむ(ん)や」を、本稿で敢えて「役柄語」という金水氏の「役割語」とは似て非なる仮称をもって論じたのは、0でも述べた通り、この語が「漢文訓読語(訓点語)」として処理されてしまっている学界の現状に満足出来ないからである。和文は仮名文とも呼ばれ、平安初期には漢文に対して一段低い位置付けであったものが、『古今和歌集』以後、文学作品において、仮名でも表記される語として「いはむや」が用いられるようになる。「いはむや」は「まして」の使用に比べれば、はるかに少数ではあるが、文学用語としての独自の用法を与えられたのである。その始めの用法は会話語としてのそれである。それは、身分の低い家来や阿修羅のような役柄の登場人物の個性(キャラクター)を表す用法であり、帝や上流貴族のような役柄では、「まして」よりも日常的に用いる言葉として、強い語気と含意を伴う用法を生んだ。しかし、平安後期の『栄花物語』『大鏡』になると、地の文にも少なからず使われており、「役柄語」としての用法は失われていくのである。